



TITLE:

静脩 Vol. 3 No. 6 (1967.2) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 3 No. 6 (1967.2) [全文]. 静脩 1967, 3(6)

ISSUE DATE:

1967-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65917>

RIGHT:



## 学生時代の思い出

堀 江 保 蔵

私が京大経済学部へ入ったのは大正14年(1925)である。講義は、教授自身の大きな著書を教科書にしたもの2, 3を除き、すべてノート筆記方式で行なわれた。ノートブックはイギリス製のフルスキャップ4帖綴、ペン先はスペンセリアンの細書きがふつうであった。日本製のノート用紙は、インキがにじんで、使えなかったのである。そのころ、すでに、学生が提供したノートブックによって、プリントが出はじめていたが、あまり当てにならないので、やはり出席してノートを取るのが学生のもっとも大事な仕事であった。

講義をよく聞き取ろうとすれば、前の方に席を占めねばならない。朝8時からの講義など、前日の夕方に教室へ入って、座席をイヤーマークするチャッカリ者もいた。欠席すれば誰かのノートを借りて穴埋めをしなければならぬ。私の同期では、鳩居堂の現社長・熊谷直清君など、そのきれいなノートがよく目をつけられたものである。

講義の本文は右ページに書き、左ページは、説明の要点や参考書を読んで得たところを書きこんだり、講義内容を整理したりするのに利用する。

ノートの穴埋めや参考書の閲覧のために、私も時折図書館へ行った。いまにして思えば、当時すでに指定図書の設けがあって、閲覧室のカウンター横に開架で並べられていた。図書館長になって旧書庫を見廻ったとき、指定図書のラベルを貼った多数の法学・経済学関係の図書を見出して、懐しく思ったことである。その閲覧室はいまの教育学部のところにあり、木造平屋の古ぼけた建物であった。そこでギクギクと地震(昭和2年3月7日奥丹大震)に揺られた記憶が、はっきり残っている。

私たちの時代に比べると、今の学生諸君の方が、ずっとよく図書館を利用している。それに応える意味でも、附属図書館の施設・設備および機能のすみやかな近代化が、切に要望せられる。

(経済学部教授)

## パリ大学法経学部図書館を利用して

藤 田 久 一

パリは学生街カルチュラタン、壮大なパンテオンの前にある法経学部の裏に隠れた小さな古ぼけた外観の建物、これがパリ大学法経学部の図書館である。いつも半分だけ開かれている重苦しい玄関の扉をまたいで中に入り、地下に通じる階段を降りると、そこが閲覧室 (Salle de lecture) になっている。まず入口の係員に学生証を見せる。建物の外観に比べて不似合なほど内部は明るく、パリでは珍しい蛍光灯が部屋全体を照らしている。椅子の数は四百以上もあるだろうがいつもほとんど空席はなく、とくに5月や10月の試験期には講義録 (Polycopiés) を抱えた学生で満員である。このように図書館利用者が多いのはフランスの学生がよく勉強するからで喜ぶべき現象かという点必ずしもそのようには思われない。

第一に、学生の数が多すぎる点 (法経学部の学生数は二万人をこえている。そのため、二回生の講義が行なわれる新法経学部がリュクサンブール公園の西側に建てられ、そこにも図書館はあるが蔵書はほとんどない)、また彼等は一般に講義録など必要不可欠のものを除いて本をあまり買わず、参考書などは図書館のものを利用すること等がその理由であろう。

さて、閲覧室の端には索引カードの棚がずらりと並んでいる。1952年を境として、それ以後の文献については、著者名カードと書名カードは別々に分けられている。その他に、古くから法経学部に提出された論文カードの棚もある。ただ古いカードはタ

イプではなく手で書かれているので、我々外国人には読みづらい。本を借りるには貸出票に必要事項と座席番号を記入し署名して貸出係に提出する。学生の利用頻度の高い本は手元にあるのですぐに渡されるが、それ以外の書物は平均三十分は待たなければならない。貸出係の上に全座席番号を印した電光板があり、そこに自分の席の番号がとると本を取りに行ける仕組みになっている。このように貸出のシステムは合理的にできてはいるが、貸出までの時間的ロスがかなり大きい。時々いつまで待っても座席番号がともらないので、しびれを切らして貸出係に調べに行くと、求める本はすでに貸出中であることがよくある。図書館の蔵書は一般の学生には館外へは貸出されない。ただ、閲覧室の廻りの書架には、判例集や辞書類が並べてあり、勝手に取出して利用することができるのは便利である。また、その年に発行された雑誌類は一階上の部屋で読むことができる。

借りた本を前にしてきて読みはじめると、向いの席の雑談が聞える。フランス人がおしゃべりなせいとか、若い女子学生が多いためか、とにかく落着いて読書できる雰囲気からはほど遠い。最後に、我々にとって嫌なことは閲覧室を出るとき、出口でいちいち鞆を開き図書館の本が入っていないことを係員に示さねばならぬことである。しかし、これも慣れてしまうと何とも思わなくなった。

(法学部大学院生)

## VOLPICELLI について

L. M.

一昨年の秋、長崎大学から本学に集中講義に来られたY先生(京大出身)から、“イタリアの東洋学者 Zandoni VOLPICELLI (1856年ナポリで生れ、1936年長崎で歿)の著書 Chinese phonology がたしか学生時代に図書館にあったと記憶していますが、現在もあるかどうかしらべていただきたい。”との申出を受けたので、本館の総合カタログをしらべるとこの書物は本館へ大正9年著者寄贈で受入れて、在庫している事がわかった。しかもこの時は Volpicelli の著書として本学にあるのはこの Chinese phonology. Shanghai, 1896. 一点だけしかみつからなかった。その後しばらくして昨年5月、再びY先生が上洛された折、今度は“Volpicelli が Vladimir というペンネームで Russia on the Pacific and the Siberian railway を London で1899年に出しているはずだが、もしあれば、そのうちの一部分をコピーしていただきたい。”とおっしゃった。そこで総合カタログをみると Vladimir の著者名で、次の二点を見つけことが出来た。China-Japan War. Lond., 1896. (法学部所蔵)と、Russia on the Pacific and the Siberian railway.

Lond., 1899. (本館、法学部、文学部、所蔵)。このうち本館所蔵の Russia on the Pacific... は最も早く明治33年に購入しているが、そのカタログはタイプライターではなく、ペンで記述されている。書庫から現物を出して、タイトルページ、カバー、その他をみても著者名としては Vladimir としか書いてない。これらの図書を受入れた当時の本館のカタログは、いずれも Vladimir が Volpicelli のペンネームであることを知らなかったし、またふしぎに思ってもそれを調べる資料もまだそなわっていなかったので仕方なかったのだろう。しかしこれでは Volpicelli と Vladimir とは全く別人として扱われているわけである。私はついでに U. S. Library of Congress: Catalog of printed cards. 1946. を参考のためしらべてみたが、そこには、Vladimir, pseud.: Russian on the Pacific. see Volpicelli, Z. の目録がのっていた。さすがは L. C. であるといささか感心しながら本館でも早速 Vladimir, pseud. see Volpicelli, Z. との参照カードを作って繰込み、それまで Vladimir のか所にあった前記の2点のカタログは、いずれもヘディングを訂正して Volpicelli, Z. のところに排列した。これで本館では、はじめて Vladimir と Volpicelli が同一人物となることが出来たわけであるが、私は、このような機会を与えて下さったY先生に厚く御礼を申し上げたいと思う。(附属図書館)

## 文献複写室から

今回諸般の事情により、テキスト複写をやめることになりました。

3月15日までに申し込まれた分については、従来通り複写いたします。

## ヨーロッパの大学図書館

—講演—

1月26日、高橋重臣氏（天理大学教授）を迎えて、ヨーロッパの大学図書館についての講演会を開催した。

百年、二百年の歴史をもつヨーロッパの大学の図書館はベルリン自由大学を除いて（これは戦後アメリカ式に建てられた）一般に建物も古く、アメリカのように近代化されていない。ヨーロッパでは従来、大学における研究や勉学は図書館を利用してなされることがなく、研究室にある教授自身の専門書で事足りており、学生もそれを利用して勉強した。したがって長い歴史をもちながら、大学図書館には本はさほどふえず常に等閑視されていた。20世紀になって出版が盛んになるとともに、ようやく図書館がクローズアップされてきたのである。しかし過去の各時代ごとに生まれたシステムが、何の調整もなく現代に混在していて、利用に支障をきたしている。例えば目録にしても、古くは大福帳式、次の時代は大きなカード式、その次には小さいカードと、2本立、3本立になっており、書架においても、この棚は本の大小、次の棚はアルファベット順という具合で一貫していない。このため検索が難しく、利用者は司書の助けを借らねば使いこなせない。近代化の遅れている点では日本の大学図書館と変らないが、日本の大学図書館の多くが、その大学人だけのものであるのに対して、市民にも旅行者にも開放されていた。しかし前述のごとく検索が非常に困難なので、紹介状をもらって、館員の全面的な援助を頼むのを必要とした。館員は実によく本のことに精通していて、サービスは行届き、その書誌学的知識は大学教授と大差がないと思われた。これは大学の司書には特に高い知識が要求され、その養成教育も bibliography を中心として非常に高度であり、検定試験の合格率50%というきびしさのためであろう。待遇のよいことももちろんである。かねがねきいていることを目前に見て、日本との大きな差をつくづく感じた。

その他、図書館発行の利用案内や目録には、出版広告や本屋の広告のページが何枚もあり、またこの利用案内や、所蔵貴重書の写真、図書館の建物の絵葉書を売っているなど、日本のお役所的な堅苦しい考え方は大分趣を異にしている興味深かった。

以上自由主義国の大学図書館について見聞を述べられたが、2月24日には京都市教育委員会の中山昭吉氏から、社会主義国の大学図書館について聞くことになっている。

### 医学図書館の Contents Service

医学部図書室開室（昭和25年）以来、約30種の外国雑誌について謄写印刷によって Contents Service をはじめ、その数は漸次増加しながら昭和32年頃まで継続した。

医学図書館開館（昭和40年10月15日）を前にして Elefax と A. B. Dick の講入申請が許可された。昭和41年2月1日に両機併用によるオフセット印刷で Current Contents No. 1 を発行以来、年間約70回新着の外国雑誌約200種について250部印刷し、医学部、附属病院の各教室、医学関係の研究所、薬学部および農学部配布し好評を得ている。また京都府立医科大学にも相互利用の申合せにより提供している。

しかし邦文雑誌については、現在とりあげかねる実状であり、外国雑誌を200種と限定したのも経費などの問題である。

より広範な情報を研究者に提供するように努力するのが今後の課題である。

——本学雑誌目録出来る——

京都大学学術雑誌総合目録 人文科学欧文篇 1966 278 P.

一昨年(1965年)の、「京都大学学術雑誌総合目録、自然科学欧文篇」(タイトル数5061)刊行にひきつづいて、今回「人文科学欧文篇」(タイトル数4782)を発刊することが出来た。歴史をかえりみると、すでに1943年、「京都大学所蔵欧文逐次刊行書目録、昭和17年12月現在」が出版されているが、その後長い空白をおいて、ようやく本学所蔵の欧文学術雑誌総合目録が、一通り完成したわけである。この編集に当って関係各部局図書室のかたがたには、業務多端の折にもかかわらず、快くご協力いただきまして厚くお礼申し上げます。

——資料紹介——

U. S. Library of Congress :

- A catalog of books represented by Library of Congress printed cards, issued to July 31, 1942. 167 v. 1942-46.
- 〃     Supplement ; ... cards issued Aug. 1, 1942-Dec. 31, 1947. 42 v. 1960.
- Author catalog ; a cumulative list of works represented by Library of Congress printed cards, 1948-1952. 24 v. 1960.
- The national union catalog ; a cumulative author list representing Library of Congress printed cards and titles reported by other American libraries, 1953-1957. 28 v. 1961.
- 〃     1958-1962. 54 v. 1963.

この一連の目録は、私達図書館職員の間で俗に、「L. C. の目録」とか、もっと簡単に「L. C.」と呼ばれているものである。

米国議会図書館(L. C.)は早くから、その蔵書および、他の若干の図書館の蔵書をもとに、印刷目録カードを作成してきたが、1942年、それを記入形態はそのまま、著者名(著者名のないものは書名)のABC順に並べて、縮小写真印刷したのが、この冊子目録の始まりである。国立図書館であるL. C.は、米国政府機関の刊行物、および全米の出版物をすべて受納する一方、諸外国語の貴重な図書をも多く含む豊富な蔵書で著名であるが、この目録は、それを網羅する(全部ではないが)ぼう大なものであるからだけでなく、記述の詳細、正確なことからも名高い。著者名、書名、出版事項など、既定の記入事項に加えて、L. C.の分類番号、カード番号、件名、それにL. C.以外の所蔵館名(最近のものは記号による)が戴せられており、Deweyの分類(D. C.)のついているものもある。

1953年以後は、収録館数を著しく増大し(500~750館)、上記タイトルの通り、米国の全国総合目録にまで発展させているので、あらゆる分野の資料がよりひろく載ることになり、利用価値が一層高まったといえる。各館の新収図書を対象に、5年毎にまとめて出版されるが、内容をみると、最近の傾向として、西欧諸国語にまじって、中国語、日本語、朝鮮語の図書もすくなくならず収録されている。また末巻は、楽譜、レコード、映画フィルムなどの記載にあてられている。

本館では、目録作成の際の、著者名、書名の確認とか、分類や参考業務の上で欠かせない重要な参考図書として役立っている。それを利用して、購入不可能な rare book や、雑誌のバックナンバーなどを、マイクロフィルムや、ゼロックスコピーで発注することも出来る。

整理室に備え付けているので、希望のかたには、そこで閲覧願っている。



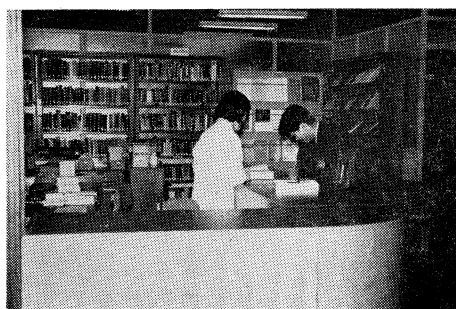
### 経済学部図書室

経済学部図書室は、大正8年の学部創立とともに設けられ、明後年をもって50年をむかえる。現在蔵書約25万冊、職員15名である。蔵書中にはA・スミスの『諸国民の富』、マルクスの『資本論』等の初版本をはじめ、貴重書多数を含む。また文庫としては、マイヤー文庫(15,000冊)、ビュッヒャー文庫(9,000冊)などがあるが、言論、出版の自由をテーマにして集められた上野文庫(11,000冊)はとくに著名である。

しかし、設立の古い図書室のいずれにもみられるように、ここにも難問は山積している。とくにぼう大な蔵書数に比して、それを収蔵する書庫が狭いいため、止むなく6ヶ所に分散していることは、図書室運営上、さまざまな障害を生んでいる。いうまでもなく大学行政全体の中で、長期かつ総合的な図書館行政が確立されていなかったことの結果である。もちろん、ここ数年の間にも、書庫の増設、閲覧室の拡充整備などが行なわれてきたが、これらはいうまでもなく、一時的な応急処置にすぎず、根

本的な改善をせまられている。図書館施設の改善については、目下学部施設改善委員会で討議され、近く成案をみる予定である。こうした状況の中で、図書室としては、日常業務のより合理的な推進とともに、(1)上に述べた図書館施設の根本的な改善、(2)目下行なっているビュッヒャー文庫の整理に引続きマイヤー文庫等特殊集書群の整理、(3)書誌的文献類の整備(現在「参考図書目録」欧文編を編成中)の3点を当面の目標と考えている。

なお、経済学部には、図書室とは別に統計書や資料を収集・整備する調査資料室がおかれ、調査・参考活動をおこなっている。当資料室をはじめ、全国の有力な経済・経営学部の図書室、資料室で組織する経済学資料協議会の『経済学文献季報』は学術会議第3部の監修のもとに、最近号第43号まで続刊されている。



### あとがき

巻頭の多くに外国の大学図書館はサービスがゆきとどいて使いやすいとあります。私達もそのような図書館に一日でも早くもっていきたいと思います。それには教官、学生、館員の協力が必要です。静脩を通じて図書館のあり方、将来を考える

ことができれば幸いです。

昨年7月まで図書館長として本学図書館の改善をはかられ、また「静脩」の生みの親である堀江先生には、御退官前の御多忙な折にもかかわらず、編集子の請いをいれて、巻頭言を御寄せ頂きました。厚く御礼申し上げます。